



Title	ヘルダーリンのPalingenesie受容
Author(s)	甲斐, 浩一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2007, 41, p. 63-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9452
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヘルダーリンのPalingenesie受容

甲斐浩一

1. はじめに

ヘルダーリン (1770 - 1843) において Palingenesie 「再生 (生から死を経ての再生)」という概念は、ヘルダー (J. G. Herder) (1744 - 1803) から受け継がれ、ヘルダーリンによる生と歴史の把握にとってきわめて重要になった、と指摘されている。¹⁾ しかしながらこの指摘は、従来の研究において十分に考慮されているとは言いがたい。²⁾ 本稿はこの指摘を受け、まず 18 世紀ドイツの独特な思想状況と Palingenesie の概念史を概観する (2 章)。次にこの概念をヘルダーリンがヘルダーからいかに受容したのかを考察する (3 章)。そしてヘルダーリンにおけるこの概念の展開を論じる (4 章)。なお「再生」とは「生まれ変わり、新生 (Wiedergeburt)」と同義である。また「輪廻転生、別の肉体における魂の生まれ変わり (ギリシャ語源の Metempsychose = Seelenwanderung、あるいはラテン語源の Reinkarnation = Wiederverkörperung)」とは、混同されることが多いけれども、本稿では明確に区別して用いる。

2. Palingenesie

一般の文学史ではほとんど言及されないが、ドイツでは 18 世紀を通して「魂の不死 (靈魂不滅)」——死後も魂は肉体を離れて永遠に生き続けるという観念——が一大ブームであった。³⁾ 多くの人々が来世での生が実在することを主張し、真剣に「魂の不死」を問題にした。古くからあるこの問題を 18 世紀ドイツの大きな時代潮流にした重要な契機のひとつとして、

キリスト教の危機をあげることができる。それまで磐石を誇っていた教会の教え、なかんずく「魂の不死」説が、当時台頭してきた理性の立場（理神論）や心情の立場（敬虔主義）から、その非合理性や超自然主義、あるいは外面的形式性や非個人性の点で激しく攻撃され、揺り動かされることになった。その結果この説は教会の占有から解放され、公の議論にさらされて変貌する。すなわち人間の知と情（加えて、合理主義と敬虔主義とに共通する神秘主義⁴⁾）の多様な形態と結びつく。そして従来のキリスト教の教えとは異なる（あるいは教会の教えを補強する）さまざまな「魂の不死」のイメージや考えが生まれるようになる。そのひとつが Palingenesie である。

他方この概念には、デル（Hartmut Dörr）⁵⁾ が示すとおり長い歴史的伝統がある。彼の多岐にわたる詳細な記述をシュミット（Jochen Schmidt）⁶⁾ が、ヘルダーリンと関連付けて上手にアレンジ（短縮）し、Palingenesie の概念史をたどっている。番号を添えてまとめると次のようになる。

- (1) 古代ギリシャにおいて Palingenesie は、新たな生まれ変わりと
いう意味での「若返り、更新（Verjüngung）」というイメージ
も含んでいる。
- (2) 初期ストア派では、消滅と再出現を繰り返す宇宙の永遠の循環
において、事物が周期的に同じ姿で回帰することを指す。
- (3) ストア派の別の考え方では、永劫回帰（周期性）ではなく、消
滅（死）の浄化作用が問題となり、新しいよりよき時代（黄金
の世紀）の始まりを指す。
- (4) 新約聖書に見られる Palingenesie もまた同様の意味で、個々人
が洗礼を受けて新たな生の時代（Aion）に入ること（生まれ変

わり)を指す。

- (5) 敬虔主義は新約聖書を背景に、新たな「生まれ変わり」(神に向かう、より深い自己の再誕生⁷⁾)を唱えた。
- (6) ボネ(Charles Bonnet)の『哲学的再生』*Palingénésie philosophique* (1769/70)は18世紀におけるPalingenesie概念の使用に最も強い影響を与えた。初版出版の同年にラーヴァター(J. C. Lavater)がドイツ語に翻訳した。
- (7) ヘルダーはボネから、彼の特殊な理論に依拠せずに、Palingenesieという概念だけを受け入れる。ヘルダーはこの概念とともに「若返り、更新」という概念も用いる。彼は、これらの概念の媒介者として、ヘルダーリンにとって最も重要だ。ヘルダーリンは、「若返り」を扱ったヘルダーの論文『ティトーンとアウローラ』*Tithon und Aurora* (1792)を読み、この一部を友人宛の書簡(1794)で引用している。

個別の議論に入る余裕はないが、全体としてはここからもまた、古代ギリシャを源に、キリスト教((4))を大きな結節点として推移していく西洋思想の大きな流れがうかがえる。さらに18世紀後半に焦点を当てれば、反教会勢力((5))やキリスト教擁護論((6))が渦巻きつつも、従来のキリスト教からその新たな代替物へと向かう時代潮流の中にヘルダーやヘルダーリンが位置していることが確認できる。

では上で指摘したヘルダーの論文を見てみよう。

3. ヘルダーからヘルダーリンへ

一般的な解釈では⁸⁾、『ティトーンとアウローラ』の全体の主題は、人間(個人および集団)の老朽に「再生」=「若返り」を対置することであったが、ヘルダーは暴力的かつ突発的な革命(Revolution)を嫌悪して

(反フランス革命)、「展開 (Evolution)」による社会の「若返り」を中心的に扱った、とされている。この作品のヘルダーリンへの影響もこうした解釈に従い、もっぱら社会の「再生」=「若返り」の側面ばかりが論じられ、いつの間にか個人の「再生」の側面、とりわけ「再生」(生→死→再生)には欠かせない死の問題への視点が消えうせてしまっている。社会においてならともかくも、個人においては「再生」と「若返り」は違うのではないか、という素朴な疑問を拭いきれない。ところがこうした中で、ウンガー (Rudolf Unger) は独特の見解を提示している。彼は個人の死という問題を視野に収め、以下に引用する箇所について次のように論じている。9) ヘルダーにとって「死の克服」となるのは、「抽象的・超越的な意味での不死」(つまり当時の啓蒙主義哲学・正統派的キリスト教の説く不死)、「昔ながらの二元論的な生と不死という観念」ではない。彼固有の個人的体験や「内在的に神や世界を見るという生命感情」から生まれた「再生 (Palingenesie, Wiedergeburt)」なのだと。この論の正否については残念ながら判断を下すことができない。しかしウンガーの視点、すなわち従来の「抽象的・超越的・二元論的」な生と不死についての見方に対し、ヘルダーが「具体的・内在的・一元論的」な見方を提示しようとした、という指摘はきわめて興味深い。われわれもこうした観点から『ティトーンとアウローラ』の一節を、ヘルダーリンが書簡で引用しなかった部分(下記引用の7行目「展開」まで) 10) も含め、検討してみることにする。

われわれの中の老いた人間は死なねばならない (Der alte Mensch in uns soll sterben)、新しい青春が伸びやかに芽生えるために。／「どうしてまたそんなことが起こるとおっしゃるのですか。老人がもう一度母親の胎内に入って生まれることなどありえましょくか」。老ニコデモスのこの疑問に対し、答えは他にありえない。「再生 (Palingenesie) ！」、

循環 (= 革命) (Revolution) ¹¹⁾ ではない。われわれのうちでまどろんでいるが、われわれを新たに若くする諸力の幸福な展開 (eine glückliche Evolution der in uns schlummernden, uns neu-verjüngenden Kräfte)。われわれ自身の老い朽ちた生 (Überleben)、したがって死、とわれわれが呼んでいるものは、優れた魂の持ち主にとっては、新たに目覚めるためのまどろみにすぎない。弓が新たに用いられるためにゆるんでいるようなものだ。田畑は、いっそう豊かに実るために休む。木は、春に新たに芽を出し成長するために、冬に枯れる。善き人を運命は見捨てない。彼が自分を自ら見捨てないかぎり。自分に絶望するという誉められぬことをしないかぎり。かの守護神は、彼から去ったかにも見えても、しかるべき時には戻ってくる。そしてその守護神とともに新しい活動や幸福や喜びも戻ってくるのだ。¹²⁾ (括弧内は筆者)

引用冒頭の議論はヨハネ福音書 (3. 3 以下) ¹³⁾ を下敷きにしている。ここでイエスは「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と語り、「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができますでしょうか」というニコデモスの疑問に、「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」と答える。つまりイエスは、人は洗礼を受けることにより超自然的に再生すると説いている。一方それに対してヘルダーは、人は自分の内なる力が外に自然に出ることにより再生する(若返り)と説くのである。イエスの再生が、人が来世(「神の国」)で生きるためのものであるとすれば、ヘルダーの再生(若返り)は、人が現世で生きるためのものである。ヘルダーはいわば「再生」にまとりついている来世的なものをすべて引き剥がし、あくまでも現世において再生(死から生への移行)を考えようとする。すなわち生と不死を「具体的・内在的・一元論的」に

捉えようとするのである。その際ヘルダーは、自らの再生（若返り）説を「自然」と結びつけている。上記引用の「田畑」や「木」という比喻からは、これら自然物を貫いている根本的な生命原理（生命の源）を見据えた自然観がうかがえる。人間と自然を並べて両者を類比的に捉えているというよりもむしろ、人間をも包み込む大いなる「自然」の中では、生と死がお互いに移行しあう（循環する）ことによって、より豊かな生を産出し続けている、というイメージが表現されている。おそらくこの比喻は、そうとなければ感受することも理解することもできないであろう。

ヘルダーリンがヘルダーから「再生」を受容するにあたって影響を受けた（共鳴した）のは、上に見た二点、すなわちヘルダーが「再生」の場所をキリスト教的な超越的な来世から移動させたこと、および彼が壮大な自然観を示してみせたこと、ではないか。以下で論証してみたい。

4. ヘルダーリン

ヘルダーリンの「再生」観は、彼の小説『ヒュペーリオン』*Hyperion* (1796 - 1798) におけるディオティーマの手紙（亡くなる直前にヒュペーリオンに宛てた手紙）から読み取ることができる。まず注視したいのは、自分が死に向かっていく様子を綴っている箇所である。

あなたが去ってから、あなたの少女はしおれてしまいました。私の中で燃える火がゆっくりと私を焼き尽くし、そしてもうほんのわずかしが残っていません。驚かないでください。自然のものはすべて浄化されるのです。花を咲かせた生命はいたるところで粗雑な素材（Stoff）を振りほどき、ますます自由になっていくのです。（158）

死を前にして肉体は徐々に滅びていき¹⁴、逆に生命力はますます高まっていく、と語られている。そして実際そのとおりのことが彼女に起こる。

引用Ⅰ：私の精神（Geist）の中の力に私は驚きました、内面の生命の前では地上の生命は色あせて光を失いました[……]私の中の生命の息吹（Geist des Lebens）はそれほど強力でした。しかし死すべき体（sterbliche Glieder）は疲れを増し、不安な重たさ（Schwere）が容赦なく私を引きずりおろしました。（159）。

そしてこのような状態で、自分は「死が私たちに与える神々の自由」（162）を恐れない、と死を受け入れたのち、死後の世界を次のように語る。

引用Ⅱ：私は人間の手になる不完全なものから解放されたのです。私はあらゆる思いよりも崇高な自然の生命（Leben der Natur）を感じたのです。——たとえ私が草木になっても、その損失はそれほど大きいでしょうか。——私は存在するでしょう。どうして私が生命の領域（Sphäre des Lebens）から消えることがありましようか[……]私たちは生きるために死ぬのです。／私は存在するでしょう、私が何になるかは問いません。存在する、生きる、それで十分です[……]（162）（強調は筆者）

ディオティーマは、現世における生命の高揚の果てに死があるとみなしている。それは彼女にとって死とは、自らが「自然」と化し、「自然の生命」と一体になることだからである。自分は「自然の生命を感じた」。今後も感じ続ける。だから自分は「生命の領域」からは消えない。だから死んでも「存在する」し「生きる」。こう言われている。では「自然」、「自然の生命」とはいったい何か。ヒュペーリオンの自然観がその内実をよく示している。

引用Ⅲ：かるやかな波のような風がこの胸の周りで戯れると、私の全存在はおし黙り耳をすます。遥かなる紺碧へと我を忘れ、幾度も

私は空のエーテルへ目を上げ、聖なる海へ目を注ぐ。すると親しい
 霊 (Geist) が私に腕をひらき、孤独の痛みが神々しい生命 (Leben
 der Gottheit)の中へと溶け込むように思われる。／すべてのものと
 一つになること、それは神々しい生命だ。それは人間の至高 (Himmel
 des Menschen) だ。／生きているものすべてと一つになること、至
 福のうちに我を忘れて全なる自然 (All der Natur) の中へ再び帰るこ
 と、それは思いや喜びの頂点だ。(16 以下) (強調は筆者)

ヒュペーリオンにとって自然は汎神論的に把握されている。「全なる自然」
 とは、知覚できる具体的な自然物すべての生命力や活動力の原理 (源) で
 ある。したがって万物の生命をくまなく支配している至高の存在であり、
 神に他ならない (神即自然)。また「霊 (精神、息吹) (Geist)」あるいは「魂
 (Seele)」というかたちで人間の内に浸透する (引用 I も参照)。ゆえにヒュ
 ペーリオンは、自然との一体感 (この上ない生命感情) を、「神々しい生命」
 = 「自然の生命」 (引用 II) を享受できる至高体験とみなすのである。こ
 こでヒュペーリオンが我を忘れて「自然」に没入していくように、死を前
 にしたディオティーマは肉体や人間界 (「人間の手になる不完全なもの」:
 引用 II) を捨て去り「自然」の中に入っていく、そしてそこで肉体の死と
 ともに再生する。彼女の生→死→再生のイメージは、形はキリスト教的で
 はあるものの、その中身は汎神論に基づいているのである。

さてディオティーマは手紙において、ヒュペーリオンの将来を予言する
 という巫女的な役割も演じている。その際も彼女は汎神論的世界を背景に
 して彼に語りかける。

あなたを慰めるのは月桂樹でもミルテの冠でもなく、オリュンポス
 でしょう、それは生きていて、目の前にあり、そして永遠に若々し

くあなたの感覚すべての周りで花咲くのです (der Olymp wirds, der lebendige, gegenwärtige, der ewig jugendlich um alle Sinne dir blüht.)。美しい世界が私の言うオリュンポスです。そこであなたは生きるでしょう。そしてその世界の聖なるものたち、自然の神々と共に、あなたは喜びを得ることでしょう。(161)

ヒュペーリオンは、英雄的行為 (「月桂樹」) を求めたギリシャ独立戦争で挫折し、恋の成就 (「ミルテの冠」)¹⁵⁾ もかなわなかった。しかし彼は今後は詩人として「オリュンポス」を、天上のものでありかつ同時に地上のもの (「生きていて、目の前にあり、そして永遠に若々しく」「感覚すべての周りで花咲く」もの) として、感覚的、具体的、内在的に (観念的、抽象的、超越的にではなく) 歌うのだ、という予言である。ディオティーマはこの予言にすぐ続き、自らが再生する死者の世界をイメージする。

おお、お会いできますのね、善良な人たち、誠実な人たちよ。深く惜しまれた人たち、世に認められなかった人たちよ。子供たち、長老たちよ。生きている多くの魂に満ちみちた (mit allen lebenden Seelen) 太陽、大地、エーテルよ、その魂はあなた方の周りで戯れ、あなた方はその魂の周りで戯れている、永遠の愛のもと。おお、あらゆることを試みてやまない人間たちを、逃げ出した人間たちを、神々の家族の中へ、彼らが捨てた自然の故郷 (Heimat der Natur) の中へ、再び受け入れてください。(162)

キリスト教的な二元論からすれば、来世とも現世とも言いがたい異教的な世界の姿である。死後の世界に「太陽、大地、エーテル」が呼び出され、これらと死者たちは「魂」の交流を行っている。直前の引用箇所に応じ、来世が来世でありながら、現世のように感覚的、具体的に表現されて

いる。またここでの表現は、引用Ⅲのそれときわめて類似している。「周りで戯れ」る（引用Ⅲ：「私の胸の周りで戯れる」）、「魂」（同前：「霊」）、「自然の故郷の中へ」（同前：「全なる自然の中へ」）。全体のイメージもそうであり、ここではまさに汎神論的世界観が表明されているのである。ディオティーマはこのことを自覚していて、こう続ける。

あなたはこの言葉をご存知です、ヒュペーリオン。あなたが私の中でこの言葉を始めました。あなたはそれをあなたの中で完成するでしょう、そしてはじめて安らげるでしょう。(162)

こうして汎神論的世界がヒュペーリオンの歌うべき主題となる。もちろん作者が、ディオティーマの口を通し、自分の分身たるヒュペーリオンに向けて、自らの詩人としての使命を語っているのである。

ディオティーマの手紙にはもうひとつ、特異な死の世界のイメージがある。手紙の末尾では次のように来世における生が賛美されている。

この世界を仰ぎ見てください。それは、自然があらゆる破滅に対する永遠の勝利を祝っている凱旋の行進のようなものではないでしょうか。かつて將軍が、捕えられた王たちを捕虜として引き従えたように、生が死を、黄金の鎖につなぎ、栄光のなかで引き従えていないでしょうか。そして私たちは、踊ったり歌ったり、姿や音色を次々に変えて、その莊嚴な行進に随行する少女や少年のようではないでしょうか。(163)

これもまた、来世とも現世とも判断のつかない描写である。「姿や音色を次々に変えて (in wechselnden Gestalten und Tönen)」という表現には、人間の無常の生、あるいは生と死の不断の交替といったイメージも読み取れる。いずれにせよここでも表現されているのは、キリスト教における超

越的な来世ではない。来世と現世が結びついたような独特な死後の世界、汎神論的な他界の像である。

5. おわりに

「再生 (Palingenesie)」という概念は 18 世紀後半には、ヘルダーおよびヘルダーリンにおいてすっかり変貌する。彼らは「再生」という観念を継承したが、キリスト教的な超越的な来世のあり方に根本から異議を唱えた。そのために、現世と来世を決して切り離さぬ見方をとった。ただし二人の流儀には違いがあった。ヘルダーは、「再生」を大いなる自然における「若返り (Verjüngung)」と新たに捉えなおし、現世における「再生」を見つめた(現世と来世を現世において一元論的に捉えた)。他方ヘルダーリンは、自らの自然把握に基づく汎神論的立場から、現世でも来世でもない第三の世界を作品に表現し、この詩的な他界における「再生」を見つめた(現世と来世を他界において一元論的に捉えた)のである。

なおヘルダーリンにおける来世と現世の独特な結びつきは『ヒュペーリオン』に限ったことではない。同じくディオティーマとの別れをモチーフにしたエレギー『ディオティーマを悼むメノンの嘆き』*Menons Klagen um Diotima* (1800) では、その末尾で今は亡き彼女との再会が歌われる。注目したいのは、ここで想定されている再会の場所である。

Guten Genien, die gerne bei Liebenden sind;
Bleibt so lange mit uns, bis wir auf gemeinsamem Boden
Dort, wo die Seligen all niederzukehren bereit,
Dort, wo die Adler sind, die Gestirne, die Boten des Vaters,
Dort, wo die Musen, woher Helden und Liebende sind,
Dort uns, oder auch hier, auf tauender Insel begegnen,

Wo die Unsrigen erst, blühend in Gärten gesellt,
 Wo die Gesänge wahr, und länger die Frühlinge schön sind,
 Und von neuem ein Jahr unserer Seele beginnt.

愛しあう者たちのもとにいるのを好むよき守護霊よ
 とどまれ 私たちとともに、私たちが共通の地で出会うまで
 あの彼方 亡き人たちがみなそこへ降り戻ろうとしているところ
 あの彼方 鶯たち 星々 父の使者たちがいるところ
 あの彼方 詩神がいる 英雄たちや愛しあう者たちの故郷
 あの彼方 あるいはまた此处でも 雪解けの島で 出会うまで
 そこで われわれの仲間をはじめて庭園で花咲き集いあう
 そこで 歌は真実となり 美しい春は久しく続き
 そして新たに われわれの魂のひと年が始まるのだ。16)

・(強調は筆者)

宇宙は巨大なサイクルをなして回帰・循環するというプラトンやストア派の宇宙論的な「再生」のイメージを背景にして、二人の再会がイメージされる。17) 再会するのは「あの彼方」すなわち来世で、と四度続いたのち、「あるいはまた此处でも」すなわち現世でも、と歌われる。詩人はここで来世から現世に目を転じて現世に生きることを決意した、と解釈すればわかりやすいのかもしれない。しかしこの解釈は、来世か現世かの選択が問題であるという前提のもとでのみ成り立つ解釈でしかない。このエレギーでヘルダーリンが用いている言葉は「此处で」ではなく、「あるいはまた此处でも」である。「あの彼方で」や「此处で」という言葉ではもはや表現できないようなところ、すなわち来世でもあり現世でもある場所、いわば第三の他界が、この詩においても想定されているのである。

テキスト

Friedrich Hölderlin: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Jochen Schmidt. 3 Bde. Frankfurt am Main 1992-94. (= Bibliothek deutscher Klassiker)

『ヒュペーリオン』は Bd. 2, 1994 から引用。この巻からの引用箇所は本文中の引用末尾の括弧内に、ページ数を記した。注においてこの全集を示す場合には KA と略記する。

翻訳は、『ヘルダーリン全集』（全4巻 手塚富雄責任編集 河出書房新社 1966-69年）所収の訳、『集英社ギャラリー〔世界の文学〕10 ドイツ I』（集英社 1991年）所収の神子博昭訳『ヒュペーリオン』を参考にした。

注

- 1) ベック (Adolf Beck) による指摘。Vgl. Friedrich Hölderlin: *Sämtliche Werke* (Große Stuttgarter Ausgabe). Hrsg. von Friedrich Beißner, Adolf Beck und Ute Oelmann. 8 Bde. Stuttgart 1943-85, Bd. 6/2, S. 682.
- 2) ヘルダーリン研究においては、Palingenesie を扱った文献はほとんどない状態である。この意味で KA の注釈は、この概念を作品解釈に導入しようとする姿勢を示して注目に値する。
- 3) Vgl. Rudolf Unger: *Herder und der Palingenesiegedanke*. In: Ders.: *Herder, Novalis und Kleist. Studien über die Entwicklung des Todesproblems vom Sturm und Drang zur Romantik*. Frankfurt am Main 1922, S. 1-23. [= Unger (1922)] Rudolf Unger: *Zur Geschichte des Palingenesiegedankens im 18. Jahrhundert*. In: *Gesammelte Studien*. Bd. 2, Darmstadt 1923, S. 1-16. Martin Mulsow: *Vernünftige Metempsychosis*. In: *Aufklärung und Esoterik*. Hrsg. von Monika Neugebauer-Wölk unter Mitarb. von Holger Zaunstöck. Hamburg 1999, S. 211-273.
- 4) パウル・ティリッヒ『キリスト教思想史』〔I〕大木英夫、清水正訳 白水社 1997年 442-445 頁を参照。
- 5) Hartmut Dörr: *Palingenesie (I)*. In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Hrsg. von Joachim Ritter und Karlfried Gründer. Bd. 7, Basel 1989, S. 40-46.
- 6) KA, Bd. 2, S. 1152-1155.
- 7) Vgl. KA, Bd. 1, S. 776-777.
- 8) Vgl. Clemens Heselhaus: *Hölderlins idea vitae*. In: *Hölderlin-Jahrbuch*. Bd. 6, 1952, S. 36-43. Ulrich Gaier: *Hölderlin*. Tübingen 1993, S. 71, 184, 416-417.

- Ulrich Gaier: *Rousseau, Schiller, Herder, Heinse*. In: *Hölderlin-Handbuch*. Hrsg. von Johann Kreuzer. Stuttgart und Weimar 2002, S. 83.
- 9) Unger (1922) : a. a. O., S. 6.
 - 10) ヘルダーリンは引用箇所 9 行目「したがって死」は省略している。
 - 11) この言葉はこの箇所においては両義的な意味であろう。
 - 12) Johann Gottfried Herder: *Werke*. Hrsg. von Hans Dietrich Irmscher. Bd. 8. Frankfurt am Main 1998 (= Bibliothek deutscher Klassiker), S. 234.
 - 13) 『聖書 新共同訳』日本聖書協会 1987, 1988 年 (新) 167 頁。
 - 14) ストア派の「エクピュローシス (ekpyrosis)」のイメージ——「火」は「素材 (物質、ヒュレー)」を生かすと同時に解体する——をもとにしている。Vgl. KA, Bd. 1, S. 641, Bd. 2, S. 1044, 1057.
 - 15) 「月桂樹」、「ミルテの冠」という隠喩については以下を参照。KA, Bd. 2, S. 1064-1065.
 - 16) KA, Bd. 1, S. 272.
 - 17) Vgl. KA, Bd. 1, S. 708-709.

(大学院博士課程単位修得退学, 言語文化研究科非常勤講師)

SUMMARY

Hölderlins Rezeption des Palingenesie-Gedankens

Koichi KAI

Der Begriff der Palingenesie (=Wiedergeburt), den Hölderlin von Herder übernahm, wurde für seine Lebens- und Geschichtsauffassung sehr bedeutsam; das aber ist eine These, die in den bisherigen Untersuchungen nur unzureichend Berücksichtigung gefunden hat. Der vorliegende Aufsatz behandelt diese These und erforscht Hölderlins Rezeption des Palingenesie-Gedankens und dessen Bedeutung in seinen Werken (im Roman „Hyperion“ und in der Elegie „Menons Klagen um Diotima“).

Herder und Hölderlin verwendeten den Begriff der Palingenesie in ganz anderem Sinne als im traditionellen christlichen, weil beide Dichter im späten 18. Jahrhundert hinsichtlich des Ortes der Wiedergeburt einen scharfen Einwand gegen die orthodox transzendent-dualistische Lehre erhoben und die diesseitige und die jenseitige Welt als absolut untrennbar zu verstehen suchten. Jedoch ist ein Unterschied zwischen den Denkweisen Herders und Hölderlins zu erkennen: Während Herder den Begriff der Palingenesie als den der „Verjüngung“ in der auch den Menschen einbeziehenden großen Natur neu fasste und sich die Wiedergeburt im Diesseits vorstellte (monistische Auffassung des Jenseits und Diesseits in dieser gegenwärtigen Welt), stellte Hölderlin aus seiner klaren Neigung zum Pantheismus, der aus seiner eigenen Naturauffassung stammt, in seinen Werken eine völlig anders geartete Welt, die weder zur diesseitigen noch zur jenseitigen gehört, dar und er begriff sie als einen neuen Ort der Palingenesie (monistische Auffassung des Jenseits und Diesseits in der dritten dichterischen Welt).

キーワード: ヘルダーリン, Palingenesie, 再生, ヘルダー, 『ヒュペリオン』